

## 研究プロジェクト

## 発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

## ■はじめに

発達障害に関しては、近年脳科学による研究が進み、またそれに伴い、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつあり、心理療法はあまり有効でないと考えられている。しかしながら、子ども・大人の発達障害に対して、心理療法による成果もあがっている。そこでこのプロジェクトでは、発達障害への心理療法的アプローチは有効なのか、またそうならばどのようなアプローチの仕方が大切なのかをさぐっていくものである。

## ■事例のエッセンスの検討

研究の1つとして、様々な発達障害の事例検討を繰り返すなかで、発達障害の特徴と、それに対する心理療法的エッセンスを把握することを行った。

その中で「主体の欠如」というのが重症から軽症までの発達障害の中心的な特徴として浮かび上がってきた。つまり主体が確立されていないから、重症の場合には言語が獲得されなかったり、他者との関係が持てなかったりする。軽症の場合にも、他者との距離のなさや直接性としてその特徴が現れてくる。

従来の心理療法は主体を前提として、内省を求めるために、発達障害への心理療法は通用しなかったと考えられる。これに対して主体のない発達障害では、主体の発生に立ち会うような関わりが必要になってくる。子どもの場合、治療関係あるいはイメージ表現における「結合と分離」が主体の発生に重要であることがわかってきている。大人の発達障害に関しては、クライアントの内省を促すような関わりではなく、「ぶつかる」ということが主たるポイントとして浮かび上がっている（河合俊雄編『発達障害への心理療



河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』（創元社）

法的アプローチ』（創元社、2010）。

## ■心理テストによる検討

発達障害の特徴をつかみ、その臨床場面での現れ方を具体的に捉えるため、ロールシャッハ・テストと話の聴き方の分析を行った。その結果、発達障害群は刺激への反応が薄く平面的で、外的現実と内的感覚を区別なく体験していることが特徴的であった。コミュニケーション障害は発達障害の主要特徴として指摘されているが、その基盤には相手の言葉と自身の印象や記憶を同一平面上で捉えるあり方がみられることが明らかとなった。一方、こうした特徴は空虚な反応の量産、表面的模倣の多用、対象の特徴と主観的記憶との混在等、実際の対話場面での現れ方は非常に多様であることも明らかに示された（畑中千紘『話の聴き方からみた軽度発達障害』（創元社、2011））。

## ■センターにおけるプレイセラピー

既に行われた事例の検討だけではな



畑中千紘『話の聴き方からみた軽度発達障害』（創元社）

くて、センターのプレイルームを用いて、発達障害の子どもに心理療法を実施して検討する研究を開始した。発達障害と診断された子どもに対して、まず発達検査を実施し、6カ月の心理療法を無料で行って、再び発達検査を実施して比較し、継続を希望する場合には引き続き有料で心理療法を続ける研究をはじめている。

## ■発達障害と現代の意識

発達障害の増加は、現代における症状や意識の変化と関連しているのではないかと、という視点からも研究している。つまり対人恐怖を代表とするような自己意識の問題である神経症が減少し、直接性を求め、内省しないあり方が増えているのである（『発達障害への心理療法的アプローチ』）。